

博物館を活用した教育の活性化について

～歴史館で教材研究～

小山 茂喜（信州大学 学術研究院総合人間科学系）

1. 講習の概要

長野県立歴史館において、博物館の教育への活用について、内容を以下の3構成で体験的に学んでもらった。

- ・博物館が持つ教育機能と教育における活用
- ・博物館そのものの機能の理解
- ・博物館を活用した授業のあり方

まず、博物館が持つ「保存」「調査研究」「教育」の3機能のうちの、「教育機能」についての概要を解説した。

博物館での学びは、実物に触れ「さわる・嗅ぐ・感じる」ことで、具体から抽象へ学びを深化させ、展示を通して子どもが既に持っている知識を再構築させ新たな知を組み立てる能力を育成でき、学校では得づらい多様な教育方法展開できる場になること、そして教育活動に活用できるか否かは、教師の授業力に係っていることを確認した。

子供たちが、五感を使い感覚的に学ぶことは、時間や場所を越えて新たな知識を得たり、これまでの知識を再構成したりする活動になり、新たな学習意欲へとつながることを解説した。

続いて、博物館の保存・調査研究については、学芸員の解説で展示見学とバックヤード見学とを取り入れ、それぞれの場所の様子を五感を使って体験的に比較し学んでいただいた。

考古の収蔵庫では、石器・縄文土器・弥生土器を実際に持ち、重さや質感のちがいを体験したり、発掘された墓などを観察したりした。

文書の収蔵庫では、近世までと近代以降とでは、紙質の違いから保存方法が異なっていることを、保存施設の比較と臭いのちがいで体験した。

X線の分析室では、出土した鉄剣のX線写真から読み取れる文字を実際にみたり、修復している様子を見学した。

また、地中から出土した木製品を保存する化学処理の過程では、危険度の高い作業を見学し、歴史館は人文科学系の施設と考えていた受講者に、化学系の施設でもあることを理解してもらった。

常設展の見学では、博物館見学の際、どの観点で見学させるかを意識してもらうかを解

説した。「本物重視で、『宝』といわれる『もの』がもつすばらしさ・迫力を説明でなく体感させるのか」「五感で具体的に触れる体験と解説とで、納得させるのか」「研究の成果や展示の意図を考えさせるのか」、授業を設計する段階で、意識してもらおう観点を示した。

続いて、博物館の教育利用といっても、実際の教育現場では、教師が専門的知識がないということで、博物館見学を取り入れたとしても、実際には学芸員等にお任せというパターンが多くみられることから、この講座では可能な限り教師自らが説明をしたり、学習課題を設定したりする博物館の活用法について学ぶことを目的とし、活用法の一つとして、パフォーマンス課題の設定を紹介した。パフォーマンス課題とは、様々な知識やスキルを総合して使いこなす（活用する）ことを求めるような複雑な課題のことで、課題解決のための複数の汎用スキルが織り込まれている課題のことである。

実際には、子供たちを博物館に連れてくるという学習を想定し、与えられた課題に対して、子供たちが調査しまとめたことを他者に伝えるための学習シートを作成するという形での教材研究に取り組んでもらった。

作成する学習シートは、博物館の展示から、「何を知った」「何を調べた」という結果を表記するシートではなく、それぞれの展示物もしくは課題に沿って博物館の展示や解説などを子供たちが調査し、自分たちが学んだこと・自分たちが考えたことを、いかに情報発信するかという観点のものである。

受講者が作成した課題は、「100年前へタイムマシーンでGo、今の生活とのつながりを探そう」（小学生向け）「ビジネスチャンスをつかめ（それぞれの時代の価値あるもの探し）」（中学生向け）「人々は、どのような願いを持って生きてきたのか、未来に生きる私たちどんな願いを持って生きていくのか」（高校生向け）など、工夫を凝らした課題が作成された。各グループで作成した課題の意図等を発表し合い、良い点など指摘し評価とした。

2. 課題

講座名が「県立歴史館で教材研究」のため、自分の授業の資料調べをしようと考えて受講した教員にとっては、パフォーマンス課題の作成は問題意識とずれてしまう場面、逆に、課題作成といっても、何に焦点を当てたら良いのかがわからず、右往左往する場面等が見受けられるので、受講者の課題意識の持たせ方を工夫する必要がある。

また、小学校教員の作成するパフォーマンス課題の多くが、古代に偏ってしまうこと傾向があることから、受講者の視野をいかに広げるかが今後の課題である。これまでに作成された課題として、環境問題や食育、防災、地域の活性化といったことに焦点を当てた例もあるので、課題教育の観点から取り組んでもらう方法も考えられる。